〔五〕生活意識の調査……第2次調査

・第一次調査によって明らかにされた　この地域の生活の事実のうち、特に問題とされるような地域の生活の事実をただ単にこうした問題があるというだけではなく、こうした問題的な事実に対して地域の人々はどんな考え方構え方をしているかという、人々の生活の意識にまで堀り下げてこれを明らかにしようとした。こうすることによって我々はこの地域の人々が課題として解決を迫られている教育上の問題を決定することができると考えた。

（1）民主的性格の調査

①調査期日並びに調査目的の概要

この調査は昭和24年度と25年度との2年間　これを現場で行っておったものであるが昭和26年、教育研究所の発足と同時に研究所の仕事の一つに取り入れて行ったものである。従って、この調査は単に目標設定のみを目的として行われたものではないけれども、このように地域の人々の民主的性格の実態を明らかにし、これを分析検討することによって、民主的意識形成のために問題点を明らかにすることは今次の地域教育目標設定と深い関係をもっておると考えて、ここに目標設定のための第二次調査としてとりあげて検討した。

子供達を含めた地域の人々の民主化のための教育を押し進め、その効果を期待するためには、地域の人々の民主的な意識の実態をできる限り明確に把えるための試みをつづけなければならないと考える。而して又、このような人々の民主的な意識を把えるための従来の調査は個人のカンや或は極めて抽象的な問題にもとずいたものであった。従って調査の結果が明らかにされても、必ずしもその結果が誰にでもそうだとうなづけるような結果を示すことはできなかった。

そこで我々は、民主化とか民主々義とかを　もっと具体的な日常的な幾つかの事実に対する人々の判断や、それに対する考え方を通して、より一層明確に把えようとした。

そしてこのような日常的な事実に対する考え方、行動の仕方の一つ一つを量的に、又継続的にしっかりとより明確なものとして把え、その生起する根源をまとめ指導の方法と機会とを見出そうと考えた。

②調査対象並びに標本としての検定

（A）対象　市立第三中学校生徒　1年生～3年生までを含めたもののうち1020名　並びにその父兄。

（B）標本としての検定

足利市の代表としてはどうか。

この調査は全市の子供を対象として実施したものではないけれども　足利市の代表としてどの程度信頼できるかを　足利市内世帯主の産業別人口によって検定してみた。

調査対象1 20名のうち回収されたもの 972名

	人口(世帯主)	標本人口	理論的予測人口
農　業	1061	86	78.7
工　業	4065	358	345.0
商　業	3150	241	235.3
吏　員	411	37	30.1
無　職	2384	142	176.0
そ の 他	1446	108	106.9
合　計		972	972.0
$\chi^2_0 = 9.45$	$0.1 > P\{\chi^2 > 9.45\} > 0.5$		

検定すれば以上のようになるが、このことからも本調査が足利市民の代表でないとは言えない。而してこの検定に使った足利市民は世帯主の産業別人口であり　これが若し世帯主でなく、大体20才以上の市民の産業別人口ででもあれば一（現在これは明らかになっていない）一より一層高い縮図性を示しているといえるような結果を期待することが出来るのではないかと考える。即ち若し大体20才以上の足利市の産業別人口の割合を調査するならば　恐らく現在の世帯主の産業別人口の割合の如く、無職者が全人口の18.2%もの多きを示すことなく、従って理論的推定人口も 176名という様な大きな数は示すことなく、よりもっと標本人口の 142名に近づいた数を示し、より一層今回の調査の縮図性としての意味を高めたであろうと考えられる。

このようなことからも本調査が少なくとも検定に表れた数字より以上に、信用していいと言えると思う。

③実施方法

記入方法については用紙（配布した）に記入されている故これを省略し、実施方法を簡単に述べてみよう。

昭和24年　町内毎に開かれた父母と教師の懇談会の際に、この調査の趣旨の概要を説明し　特にこの調査が父兄や生徒のもっている社会性の一人一人のよしあしを知るために行うものではなく、地域の生徒や父兄の全体的な動向を明らかにするために行うものである、ことを話し了解を求めた。

④実施項目

1.天皇制

（　）今まで（戦争前）のような考えは多少改めてもしかたがない。

（　）今までの天皇制は絶対にまもらなければならない。

（　）天皇制は一部のものに利用されるからはいしした方がよい。

（　）新しい時代にあうように考えをかえた方がよい。

2.政治の方法

（　）意見の違った人をも重んずる政治がよい。

（　）少数の偉い人々による政治がよい。

（　）唯一人の偉い指導者による政治がよい。

（　）大多数の人々の意見に従う政治がよい。

3.町の顔役（親分）などは

（　）とかくいばったりらんぼしたりするから困る。

（　）彼等は子分を世話したり弱い者を助けてやるのでよい。

（　）今のような混乱した時代には利用した方がよい。

（　）これからの民主々義の時代にはこんなのはいらない。

4.強い国と弱い国

（　）弱い国は必ずしも劣等民族ではない。

（　）強い国が世界を支配するのはあたりまへである。

（　）どんな民族も人種も差別することはやめなければならない。

（　）弱い国は強い国に保護されるのがよい。

5.婦人参政権

（　）婦人は参政権を充分行使出来ない。

（　）民主的社会を作るためには婦人も政治に参加することが絶対に必要だ。

(　　) 婦人参政権などそんなに必要ではない。
(　　) 婦人が政治に参加することは好ましい。

6.戦　争

(　　) 戰爭に勝つ国は正しく敗けた国は悪者にされる。
(　　) 強い軍隊を持つことは国が栄える基である。
(　　) 戰爭はぜったい反対である。
(　　) 正義のための戰爭はやむをえない。

7.偉い人が華族にされることは

(　　) 社会的に立派な働きをした人には何か特権を与えてもよい。
(　　) 世の中のために立派な働きをした人は華族として社会的に表彰するのは当然である。
(　　) 華族は一代限りではいしすべきである。
(　　) たとえ立派な働きがあっても社会的身分まで与える必要はない。

8.奉　仕

(　　) 貴重な時間をつぶしてまで奉仕する必要はない。
(　　) 自分の利益にならない事ならやらない方がよい。
(　　) 人は常に自分のことよりも社会に奉仕することを考えなければならない。
(　　) 自分のことと他人のことを同時に考えていなければならない。

9.会議をするとき

(　　) 各々が勝手な事を云うのはよくない。
(　　) 少数の反対者の意見も重んじなければならない。
(　　) 大多数の意見を押切ってもよい。
(　　) 全体の意見が一致するまで話しあうべきである。

10.自分の意見に賛成しない人に対して

(　　) いくらいってもきかせてもわからない時は腕力を振う。
(　　) 相手の意見を重んずる。
(　　) 云ってきかすよりも腕力でやっつける方が早く片付くのでよい。
(　　) 賛成してくれるまでよく話し合う。

11.皆で遊ぶ時

(　　) 他の人達と自分のしたい事が違う時自分のしたい事はあきらめる。
(　　) 自分の好きな事をした方がよい。
(　　) 反対する者はぬかしてしまう。
(　　) 皆がしたい事をする。

12.職業の選び方

(　　) 親の意見を重んずべきである。
(　　) 親の考えと違っても自分のすきなものを選ぶべきである。
(　　) 親の仕事を続けるのが一番間違いがない。
(　　) 親の賛成を得た方がよい。

13.祖先崇拝

(　　) 民族の過去よりも将来の事を常に考えていなければならない。
(　　) 祖先を尊重する事によって強い国民の精神が養われる。
(　　) 祖先崇拝は民族の進歩をさまたげる。

(　　) 祖先崇拝は日本人の美徳である。

14. 宗　教

(　　) 個人の宗教に関しては誰も干渉してはいけない。

(　　) 日本には立派な宗教があるから外国の宗教はいらない。

(　　) 親の反対を押し切っても自分のすきな宗教を信ずるのはよくない。

(　　) 家代々の宗教を守った方がよい。

15. お正月に門松を立てて祝う習慣など

(　　) 悪いことがなければいつまても守りたい。

(　　) 無用な習慣である。

(　　) 昔からの美しい習慣はいつまでも守るべきだ。

(　　) 時代に応じて新らしいやり方をした方がよい。

16. 公園の花を折る事は

(　　) 木がかわいそうだからいけない。

(　　) 先生などにしかられる事だからよくない。

(　　) 他の人々が見られなくなるからいけない。

(　　) 人のものを取るのと同じだからいけない。

17. 自分一人でやる自信ない場合

(　　) 親や先生の指図を受けてやる。

(　　) よく考え注意して自分でやってみる。

(　　) 親や先生にやってもらう。

(　　) やれるところまで自分でやる。

18. どんな人が一番偉いか

(　　) 世界を支配する英雄

(　　) 世界の平和にこうけんする人

(　　) 国の力を外国にしめす人

(　　) 人類文化にこうけんする人

19. 日本語では相手をさす時に、あなた、君、お前、貴様などと色々云いわけるが

(　　) 相手の身分によって言葉をかえるのはよくない。

(　　) 相手の身分によって色々云いわけられるために必要である。

(　　) 英語では"you"とゆう一つの言葉ですべての相手をさすが日本もこうなるとよい。

(　　) 相手の身分によって色々云いわけられるために便利である。

20. 自　治

(　　) 先生の指図に従っている方があやまりがない。

(　　) 生徒の事は完全に自分たちだけでやるべきだ。

(　　) 生徒は先生の指導のままにうごけばよい。

(　　) 先生の意見は出来るだけ重んじなければならない。

21. 学校の勉強以外の自由研究や運動は

(　　) 出来るだけ活潑にやった方がよい。

(　　) 勉強のじやまになるからやらない方がよい。

(　　) 学校の勉強と同様に大切だ。

(　　) 学校の勉強によゆうがあればやった方がよい。

22. 生徒と先生との考えが合わない時

(　　) 自分の考えを考え直す必要かある。

(　　) 自分の考えを通せばよい。

(　　) 先生の考えに絶対に従うべきである。

(　　) 両方の考えが一致する迄話しあうとよい。

23. 勉　強

(　　) 自分でどんどん勉強するのがよい。

(　　) 復習よりも予習の方が大切である。

(　　) 教わったことだけをよく覚えてゆけばよい。

(　　) 予習よりも復習の方が大切である。

24. 友　達

(　　) 皆と仲良くやってゆく。

(　　) 自分の好きな友達とだけ遊ぶ。

(　　) 意見の違う友達とも仲良くやってゆく。

(　　) 表面は仲良くつきあってゆく。

25. 委員の選挙

(　　) 皆に責任を持たすには選挙が一番よい方法だ。

(　　) 選挙はめんどうである。

(　　) 先生が指名すれば一番よい。

(　　) 民主的な人を作るには非常によい訓練た。

26. 上級学校を選ぶには

(　　) 現の意見に従うのがよい。

(　　) 自分の好きなようにききめるのがよい。

(　　) 社会に役立つものを選ぶのがよい。

(　　) 将来見込の多いものを選ぶのがよい。

27. 学校の規則に対しては

(　　) 校則に従っていれば吾々は悪い事をしないですむ。

(　　) 校則で生徒が自由にのびるのをしばってはいけない。

(　　) 校則には絶対に服従しなければいけない。

(　　) 各人がしっかりしていれば規則などはいらない。

28. 悪い事をした生徒をなぐる事は

(　　) いくら云ってもきかない時にはなぐっても仕方がない。

(　　) 言葉でさとすよりなぐった方がききめがある。

(　　) 絶対になぐってはいけない。

(　　) ときにむちでたたくのはこらしめになる。

29. 退校問題

(　　) 悪い生徒をよくするのが学校のつとめだ。

(　　) あまりにも悪い事をするものは退校さすのもやむを得ない。

(　　) 悪い生徒はどんどんやめさせるべきだ。

(　　) 生徒自身もなっとく出来るように取扱うべきだ。

30. 勉強をなまける事は

(　　) 自分が偉くなれないから損だ。

(　　) 文化の発達をさまたげることになるからいけない。

(　　) 先生にしかられるから悪い。
(　　) 友達に迷惑をかけることになるからいけない。

31.男女共学
(　　) 男女の特長を別々にのばした方がよい。
(　　) 男女一緒に勉強する事は嫌いである。
(　　) 女子は男子と同じ勉強をする必要はない。
(　　) 完全な共学が必要である。

32.低能児や劣等生
(　　) 低能児が敗けるのはやむを得ない。
(　　) 低能児とは云え正しく保護され、一人前の権利がみとめられなければならない。
(　　) 低能児は社会のじやまものである。
(　　) 低能児はその力に応じて適当に取扱えばよい。

33.校　風
(　　) 校風をみだすことはよくない。
(　　) 校風のために却って個人の特長が失われる。
(　　) 時代によって校風もかえるべきである。
(　　) 校風を守る事は吾々の誇りである。

34.生徒の服装は
(　　) 各人の自由にしておいた方がよい。
(　　) 各地方によってそれそれ特長をもっているとよい。
(　　) 学校によってそれぞれ違っていてもよい。
(　　) 全国一様にきめられているとよい。

35.子供の教育
(　　) 男も女も子供はすべて平等に教育されねばならない。
(　　) 長男は家の後取りだから特別に教育されねばならない。
(　　) 子供の特長を生かすようにそれぞれ違った教育をした方がよい。
(　　) 女の子よりも男の子の方に高等教育を一そうよく受けさせておく必要がある。

36.男の子の家事の手伝いは
(　　) 男の子は家事の事になれない方がよい。
(　　) 男の子が家事を手伝うなんておかしい事だ。
(　　) 人手が足りない時にだけ手伝う。
(　　) 男の子でも家事の手伝いをすべきである。

37.家庭で男が女よりいばる事は
(　　) 男の方が偉いから仕方がない。
(　　) 男がいばるのは悪いことだ。
(　　) あたりまえだ。
(　　) いはらない方がよい。

38.家の財産は
(　　) 男の子にだけ平等に分けるべきだ。
(　　) 長男は家をつぎ親を養う義務があるから親の財産は長男に大部分ゆずるべきだ。

(　　) 親の財産は男女の子供に平等に分けるべきだ。
(　　) 長男の分を多くするのはとうぜんだ。

39. 家庭で風呂に入る順序

(　　) 家族の入る須序を大体きめておく。
(　　) 父親が入らなければ他の者は絶対に入らない。
(　　) 都合のよい者から入る。
(　　) 男が先に入る。

40. 国家と国民

(　　) 国家のためには国民の自由をぎせいにすることもやむを得ない。
(　　) 国家の方針は国民の考えできめるべきである。
(　　) 国家のためになるように国民の生活を指導すべきである。
(　　) 国家は常に国民の自由を重じなければならない。

⑤結果の処理

地域の生徒や父兄の考え方を形成上に、社会の動向かどのような影響を及ぼしているかを明らかにすると共に、更に子供の考え方と父兄の考え方との推移を分析することによって、又子供の意識が父兄の意識や行動からどのような影響を受けているかを明らかにしようという意図をもつて行った調査であり、処理もこうしたねらいにもとずいて、各項目毎に父兄生徒の意見を職業別、性別、年令別に集計した。

上述の項目40項目について実施したわけであるが、5ケ年間継続して実施した項目はさきにゴジツクで示した10項目であり以下これだけについての解釈をのせてみよう。

社会性調査

(1) 天皇制

		昭和24	昭和25	昭和26	昭和27	昭和28
新らしい時代にあう様に考えをかえた方がよい	父兄	62.0	53.7	48.7	46.8	52.2
	生徒	78.2	69.3	79.6	63.9	69.7
戦争前のような考えは多少改めても仕方ない。	父兄	18.6	27.9	26.1	28.2	23.3
	生徒	9.9	17.6	8.4	19.2	14.4
今迄の天皇制は絶対に守らなければならない。	父兄	16.2	16.3	20.7	20.4	20.8
	生徒	9.7	11.4	9.4	13.4	12.3
天皇制は一部の者に利用されるから廃止した方がよい。	父兄	3.2	2.1	4.2	4.6	3.3
	生徒	2.1	1.8	2.4	3.5	3.1

(2) 街の顔役（親分）などは

これからの民主々義の時代にはこんなのはいらない。	父兄	80.0	83.9	82.7	79.7	81.1
	生徒	79.0	84.0	84.7	75.4	79.8
とかくいばつたり乱暴するから困る	父兄	11.5	9.0	8.4	11.5	10.6
	生徒	9.3	8.4	6.6	8.1	11.4
彼等は子分を世話したり弱い者を助けてやるのでよい。	父兄	5.1	4.9	4.1	5.7	4.2
	生徒	7.2	4.7	4.7	8.1	6.9
今の様な困乱した時代には利用した方がよい。	父兄	3.4	2.2	3.8	2.6	3.5
	生徒	4.5	2.9	3.7	7.7	1.5

(3) 戦　争

戦争は絶対に反対である。	父兄	59.2	43.3	45.2	50.4	50.5
	生徒	58.9	46.6	55.2	61.5	71.4

		昭和24	昭和25	昭和26	昭和27	昭和28
正義のための戦争は止むを得ない	父兄	36.2	48.8	45.1	38.1	38.8
	生徒	37.2	49.2	41.2	31.8	25.5
強い軍隊をもつことは国が栄える基である。	父兄	2.2	4.7	7.2	7.5	6.0
	生徒	3.4	3.0	1.5	4.0	1.5
戦争に勝つ国は正しく敗れた国は悪者にされる。	父兄	2.5	3.2	2.4	3.5	3.8
	生徒	1.5	1.2	1.2	2.4	1.0
（4）祖先崇拝						
祖先崇拝は日本人の美徳である。	父兄	55.3	58.1	50.5	51.4	54.8
	生徒	50.9	57.6	47.6	53.0	44.3
祖先を尊重することによつて強い国民精神が養われる。	父兄	23.3	21.3	31.0	25.9	22.8
	生徒	23.0	20.5	26.8	24.8	26.2
民族の過去よりも将来のことを常に考えていなければならない。	父兄	19.3	15.6	13.7	13.7	18.1
	生徒	22.9	16.1	18.4	12.7	20.6
祖先崇拝は民族の進歩を妨げる。	父兄	1.9	5.0	2.9	5.6	3.8
	生徒	3.9	5.8	6.9	7.6	7.2
（5）お正月に門松を立てて祝う習慣など						
昔からの美くしい習慣はいつまでも守るべきだ。	父兄	36.4	46.1	48.8	44.5	34.2
	生徒	39.0	44.2	59.1	53.8	42.2
時代に応じて新らしいやり方をした方がよい。	父兄	42.5	28.9	23.7	24.2	35.7
	生徒	37.3	30.3	22.2	16.7	23.6
悪いことがなければいつまでも守りたい	父兄	18.6	21.2	22.0	24.5	24.2
	生徒	21.9	24.0	16.0	24.2	31.1
無用な習慣である。	父兄	2.5	3.8	5.5	5.6	5.1
	生徒	1.8	1.5	2.5	5.3	2.6
（6）どんな人が一番偉いか						
世界平和にこうけんする人	父兄	55.5	51.5	58.6	55.2	56.1
	生徒	60.9	55.3	66.5	65.5	62.0
人類文化にこうけんする人	父兄	38.2	36.3	32.0	36.4	36.3
	生徒	32.6	34.5	22.9	27.5	24.4
世界を支配する英雄。	父兄	4.1	8.2	6.0	4.7	4.2
	生徒	2.4	7.6	5.2	2.8	3.1
国威を発揚した人	父兄	2.2	4.0	3.4	3.4	2.9
	生徒	3.1	3.2	5.4	2.8	1.7
（7）悪いことをした生徒をなぐることは。						
いくらいつてもきかないときはなぐつてもしかたがない。	父兄	52.2	59.7	60.1	56.4	60.4
	生徒	58.0	62.2	62.3	65.5	73.7
絶対になぐつてはいけない。	父兄	28.0	23.3	26.1	26.9	25.0
	生徒	29.4	26.6	28.6	25.7	18.7
時にむちでたたくのはこらしめになる。	父兄	14.1	11.3	8.5	12.1	10.0
	生徒	7.8	5.0	4.2	5.1	3.9
言葉でさとすよりなぐつた方がききめがある。	父兄	5.7	5.2	4.8	4.1	3.5
	生徒	4.8	6.2	4.7	3.3	2.9

（8）子供の教育

男も女も子供はすべて平等に教育されなければならない。	父兄	58.1	44.0	37.2	50.2	54.5
	生徒	74.4	51.3	52.8	66.7	64.8
子供の特徴を生かすために、それぞれ違つた教育をした方がよい。	父兄	24.2	38.0	43.4	31.5	32.8
	生徒	10.0	29.0	36.5	20.8	22.7
女の子よりも男の子の方に高等教育を一層よく受けさせておく必要がある。	父兄	14.2	14.3	16.0	15.3	10.2
	生徒	11.6	16.8	7.4	10.2	6.5
長男は家のあととりだから特別に教育されねばならない。	父兄	3.5	3.7	3.1	3.0	2.0
	生徒	4.0	3.4	3.0	1.6	8.7

（9）家庭で男が女よりいばることは。

いばらない方がよい。	父兄	71.4	74.1	69.2	69.8	73.8
	生徒	67.3	71.8	66.7	66.9	66.3
男がいばるのは悪いことだ。	父兄	19.1	15.6	17.7	21.6	10.4
	生徒	19.1	16.0	20.0	22.2	19.2
男の方が偉いから仕方がない。	父兄	5.3	6.8	7.5	5.5	5.4
	生徒	7.3	6.2	7.2	5.3	6.5
あたりまえだ。	父兄	5.2	4.1	5.0	2.9	3.9
	生徒	5.8	6.0	5.9	4.6	7.2

(10) 親の財産は。

親の財産は男女平等に分けるべきだ。	父兄	53.1	46.5	40.5	49.2	48.2
	生徒	74.4	63.6	70.4	70.9	67.4
長男の分を多くするのは当然だ。	父兄	24.2	36.6	32.8	30.3	28.5
	生徒	10.0	20.9	10.9	13.5	12.7
長男は家をつぎ　親を養う義務があるから親の財産は長男に大部分譲るべきだ。	父兄	14.2	14.7	23.7	18.3	21.0
	生徒	11.6	13.2	17.7	11.7	15.6
男の子だけ平等に分けるべきだ。	父兄	3.5	2.2	2.5	1.2	1.7
	生徒	4.0	2.3	1.0	2.3	3.7

（1）「天皇制について」

詳細については前記の表によって明らかであるが昭和28年度の父兄並びに生徒の意見は次のような結果になっている。

	父兄	生徒
「新らしい時代にあうように考えをかえた方がよい」	52.2	69.7
「今迄のような考えは多少改めても仕方がない」	23.8	14.4
「今迄の天皇制は絶対に守らなければならない」	20.8	14.4
「天皇制は一部のものに利用されるから廃止した方がよい」	3.3	3.1

以上のような意見になっている。

天皇制については　すでに憲法に　民主的な姿に定められている現在「新らしい時代に合うように考え方をかえた方がよい」という意見が、52.2%の父兄と69.7%の生徒とによって支持されているということは一応もっともなこととしてうなづける。併し又その反面「今迄の天皇制は絶対に守らなければならない」という意見を、父兄20.8%　生徒14.4%が支持しているということについても注意が払われなければならないと思われる。このような絶対に天皇制を守らなければならないというような天皇制護持の意見

は、民主的な社会を作るためにいろいろな努力が試みられているにもかかわらず、依然としてこれといった変化がなく、この調査を開始した昭和24年以降ひきつづいて支持されている。

又この調査に併用して行った面接による調査によって、それぞれの意見をどのようなすじみちによって支持しているかを考えてみると、ここにも大きな問題がある。提示された質問そのものにも問題があると思われるけれども ただそれだけではなく、人々の考え方は極めてぼんやりとしておりあいまいであり、又自からの確信というようなものではないということであった。即ち「天皇制も新らしい時代にあうように考えをかえた方がよい」という意見をもつ人達も、そうした意見の底には 民主化のためにはどうしてもそうしなければならないというようなものはなく、「世の中が変ったのだから…。」とか「まあ天皇制はいけないってことだから 改めた方がいいのでしようね—」とかいうように その根拠も薄弱であり あいまいなものであった。「天皇制は絶対に守らなければならない」という意見を支持する人達の中にも、何人かは日本の国の国柄を考え 戦前の国家の態勢というようなものを考えて今後も絶対に必要だと主張する人達もあったが、大部分は「昔からそうなのだから守っていかなければならない」とか「天皇制を改めてしまったからこうした混乱した戦後の世の中になってしまったのだ」とかいうように、極めてぼんやりとした考え方で判断し、又深く考えないで何となく戦後の混乱と結びつけて天皇制を改めたから そうなったのだとかいうような考え方によって判断して支持しているのであった。

ぼんやりさと共に問題にされなければならないこととして 物事の判断が理性的になされず 感情的になされているということがあげられる。

即ち「天皇制は改めたほうがよいとか 廃止したほうがよいとかいうようなことは共産党かその同類のいうことだ」「俺は共産党がきらいだからそういう意見には、反対だ」というように、きらいだから不賛成だというような感情によって物事を判断しようとするような傾向は極めて強い。このような「ぼんやりとした考え方」「感情的な気分によって物事の正邪の判断がなされる」というような問題的な考え方については、今後更にあらゆる角度から検討され、これが改善のための努力がなされなければならないと考えられる。

(註) 「ぼんやりとした思考過程」「単純」「感情先走り」そして更にこうした考え方に深く関係した「変り易さ」というような問題的な思考の型は、他の「意識形成過程の調査」や「児童生徒の意識形成過程の調査」等の調査にも明瞭に現われている。

最も批判的であってよいと思われるところの「天皇制は一部のものに利用されるから廃止したほうがよい」という意見を支持する理由の中にさえ「誰々さんなどがそういうから」とか「うちでそういうから」とかいうように、ただあの人がいうからとかうちの大人がそういっているからとかいうような権威によりかかった主体性のない考え方は民主的社会を建設していく上に 欠くことのできない合理的・批判的な精神とは全く反対なものである。このような考えを更に 父兄と生徒との考え方の異同の比較を通して考えてみると次のようになっている。表によっても明らかなごとく

「新らしい時代に合うように考えをかえた方がよい」という意見を支持する生徒は「新らしい時代に合うように考えをかえたほうがよい」においてはさきにものべたように24年以降 父兄と生徒の差は約20%の差を示し、生徒の方が父兄よりも好ましい姿を示している。このような好ましさは又「今迄の天皇制を絶対に守らなければならぬ」とい

う頃の支持にも現れ、ここでも父兄約20%前後、生徒約11%前後と　10%の差を示したまま経過してきている。このような差が生じているその背後には幾つかの原因があると思われるが　その一つにとかくの異論はあっても、正しい学校教育の効果の現れと認めることができるように思う。ただ併し．その効果も決して、満足すべきものではない。我々は更にさきにものべた考え方のボンヤリさと関係している「変り易さ」について充分考えてみなければならないことがあるように思う。

我々がこの点を強調するのは人々の考え方を知ろうとするとき、これからはただそれがどういう結果になって表れているかだけではだめであって、それがどの位変り易いか変りにくいかという観点からも、検討されなければならないものだと考えるからである。さもないと子供達は卒業、混乱した世の中に出たとき容易に正しさを失って　ゆがんだ考え方に妥協していってしまいそうに思われるからである。

即ち、現状では学校と社会の違いの大きいことから学校教育によって作られた子供達の民主知な意識や行動の様式も　家庭や社会、なかまの間で行動化されるという機会が極めて少なく、全く違った行動をとることを強く要請されている。このような事情　即ち修得した意識や態度が行動化されないという事情の下においては、一度習得された子供達の意識や態度はやがて急速に萎縮してしまう。そこで我々はこの萎縮を計算にいれて、容易に変らないような　明確な意識の形成を考えると共に、更には子供達が行動化することのできないような現実の社会の中で、なおよりよい社会をつくるためにどうすべきかを常に自から学びつつ　明確な意識を形成していくことができるように少年を作らなければならないと考えるのである。こういう点から子供達のあいまいさがもう一度反省されなければならないと考えるのである。

又最近のように　新聞・雑誌・ラジオ等のような　マス・コミュニケーションの力が大きくなってきて、人々はこのマス・コミュニケーションの威力のまえに 自主性を奪われうずまきにまきこまれて、何が正しいか、人間がどのようにして生きなければならないかというような人間の本当の生き方を見失ってしまうということが容易に考えられるからである。新聞・雑誌・ラジオ等の報道機関は　我々がいろいろと物事を考える上に欠くことのできないものではあるけれども、それが多少でもゆがめられたり異常に発達してしまうとき人間の考え方は容易にゆがめられてしまう恐れがある。そこでこのようなマスコンの力に対抗して自主性を失わないで　一歩－歩民主々義的な社会をつくっていくことのできるような子供達をつくるために、特に考え方のボンヤリさや単純な考え方感情的な考え方が問題にされなければならなくなってきていると考えるのである。即ち子供達の考え方を「ボンヤリでなく明確に」「単純でなく広い角度から」「熱情的でなく理性的」なものにするために、今後教科並びに教科以外のあらゆる機会を把えて、種々の努力が払われなければならないと考えるのである。

（2）「街の顔役（親分など）は」

	父兄	生徒
「これからの民主々義の時代にはこんなのはいらない」	81.8	79.8
「とかく威張つたり乱暴したりするから困る」	10.6	11.4
「かれらは子分を世話したり弱いものを助けたりするのでよい」	4.2	6.9
「今のような混乱した時代には利用した方がよい」	3.5	1,9

「これからの民主々義の時代にはこんなのはいらない」といって強く街の顔役を否定しているものと、稍否定の度は弱いけれでも、とにかくこれを否定しているところの「と

う頃の支持にも現れ、ここでも父兄約20%前後、生徒約11%前後と　10%の差を示したまま経過してきている。このような差が生じているその背後には幾つかの原因があると思われるが　その一つにとかくの異論はあっても、正しい学校教育の効果の現れと認めることができるように思う。ただ併し．その効果も決して、満足すべきものではない。我々は更にさきにものべた考え方のボンヤリさと関係している「変り易さ」について充分考えてみなければならないことがあるように思う。

我々がこの点を強調するのは人々の考え方を知ろうとするとき、これからはただそれがどういう結果になって表れているかだけではだめであって、それがどの位変り易いか変りにくいかという観点からも、検討されなければならないものだと考えるからである。さもないと子供達は卒業、混乱した世の中に出たとき容易に正しさを失って　ゆがんだ考え方に妥協していってしまいそうに思われるからである。

即ち、現状では学校と社会の違いの大きいことから学校教育によって作られた子供達の民主知な意識や行動の様式も　家庭や社会、なかまの間で行動化されるという機会が極めて少なく、全く違った行動をとることを強く要請されている。このような事情　即ち修得した意識や態度が行動化されないという事情の下においては、一度習得された子供達の意識や態度はやがて急速に萎縮してしまう。そこで我々はこの萎縮を計算にいれて、容易に変らないような　明確な意識の形成を考えると共に、更には子供達が行動化することのできないような現実の社会の中で、なおよりよい社会をつくるためにどうすべきかを常に自から学びつつ　明確な意識を形成していくことができるように少年を作らなければならないと考えるのである。こういう点から子供達のあいまいさがもう一度反省されなければならないと考えるのである。

又最近のように　新聞・雑誌・ラジオ等のような　マス・コミュニケーションの力が大きくなってきて、人々はこのマス・コミュニケーションの威力のまえに 自主性を奪われうずまきにまきこまれて、何が正しいか、人間がどのようにして生きなければならないかというような人間の本当の生き方を見失ってしまうということが容易に考えられるからである。新聞・雑誌・ラジオ等の報道機関は　我々がいろいろと物事を考える上に欠くことのできないものではあるけれども、それが多少でもゆがめられたり異常に発達してしまうとき人間の考え方は容易にゆがめられてしまう恐れがある。そこでこのようなマスコンの力に対抗して自主性を失わないで　一歩－歩民主々義的な社会をつくっていくことのできるような子供達をつくるために、特に考え方のボンヤリさや単純な考え方感情的な考え方が問題にされなければならなくなってきていると考えるのである。即ち子供達の考え方を「ボンヤリでなく明確に」「単純でなく広い角度から」「熱情的でなく理性的」なものにするために、今後教科並びに教科以外のあらゆる機会を把えて、種々の努力が払われなければならないと考えるのである。

（2）「街の顔役（親分など）は」

	父兄	生徒
「これからの民主々義の時代にはこんなのはいらない」	81.8	79.8
「とかく威張つたり乱暴したりするから困る」	10.6	11.4
「かれらは子分を世話したり弱いものを助けたりするのでよい」	4.2	6.9
「今のような混乱した時代には利用した方がよい」	3.5	1,9

「これからの民主々義の時代にはこんなのはいらない」といって強く街の顔役を否定しているものと、稍否定の度は弱いけれでも、とにかくこれを否定しているところの「と

かく威張ったり乱暴したりするので困る」というものを　合せてみると　父兄91.7%　生徒91.2%と何れも九割余のものがこれを否定している。このような結果は現在のような、民主化への努力があらゆる点でおしすすめられている現在、一応予測されるところである。而してここで我々は、民主化へのあゆみをひたすらあゆまなければならない現在、なお「顔役」というようなものの存在を肯定しようという考えが一割近くの父兄や子供にあるということに充分注意しなければならないと考える。必ずしもそうはならないが　市民の一割といえば　足利の成人の人口を3万とすれば 3000人の人達が　こうした考え方を支持しているのである。しかもこのような傾向は　昭和24年以降殆んど変化がみとめられない。

而してこのような、民主々義とは全く逆行すると思われる考え方を支持している一割近くの人達のすべてが、民主々義的な考え方をもっていないというわけではなく、多くの人々が弱い者として無慈悲な力におしつぶされながら毎日の生活をつづけつつ　そのあいだに一つの補償のはたらきとして、無慈悲な権力を否定し、ときとして一身を犠牲にしても弱い者の立場を主張しようとするような　親分子分の間柄に共感して　この考えを支持している点もあると思われるが、矢張り問題的な考え方として注意されなければならないと思う。特にこうした考え方をもつ態度は理論として原則としては民主々義を肯定しつつ行動として又個々の場においてはそれと全く異った考え方や行動をとって、別にそれ程奇異とも感ぜず、むしろ理論と現実とは別なのが当然だ、というような考え方にささえられている限りにおいて、大いに注意されなければならない問題がひそんでいると考えるのである。民主々義についてしっかりとしたすじがねが一人一人の心の中に芽生えていない民主々義もいづれ借りものにすぎないというような批判はこんなところにもあると思われる。

（3）「戦争」

	父兄	生徒
「戦争は絶対に反対である」	50.5	71.4
「正義のための戦争は止むを得ない」	38.8	25.5
「強い軍隊をもつことは国が栄える基である」	6.0	1.5
「戦争に勝つ国は正しく敗けた国は悪物にされる」	3.8	1.0

このような調査の結果は、戦争というような事実に対する父兄並びに生徒の考え方の正しさを物語っているように思われる。ただ併し我々がここでも注意しておかなければならないことは、さきにものべたところの父兄並びに生徒がそれぞれの項目をどんなすじみちで正当化しているかという正常化のすじみちについてであり、更には変り易いかどうかということについてである。即ちこの調査結果だけをみれば、一応それ程の問題はないように思われ以上の結果も少し突込んでみると、その考え方は極めて流動的であり支持するすじみちも又極めてあいまいであるように思われる。このことは「戦争は絶対に反対である」「正義のための戦争はやむを得ない」等の、支持率の変化の中に、世の中の流れ特に新聞やラジオ等のマス・コンの影響に大きく左右されている人々の考え方の実態があらわれていると思われるからである。

		昭和24	昭和25	昭和26	昭和27	昭和28
「戦争は絶対に反対である」	父兄	59.2	43.3	45.2	50.4	50.5
	生徒	58.9	46.6	55.2	61.5	71.4
「正義のための戦争は止むを得ない」	父兄	36.2	48.8	45.1	38.1	38.8
	生徒	37.2	49.2	41.2	31.8	25.5

即ち昭和24年には父兄、生徒何れも戦争絶対反対が59.2%，58.9%と正義のためなら止むを得ないという意見よりも多かったのであるが、朝鮮動乱の起った昭和24年の終り頃から、生活のゆきづまりや朝鮮戦乱の原因を一方的な侵略というようにきめつけているマス・コンの影響を簡単に受け入れて　戦争反対から戦争肯定に転移している人々の考え方の中に、民主々義の最後の支えとなる個々の人々の自主性と主体性とがどのようなものであるか、極めて頼りないものであることを痛切に感じさせられるのである。

（4）「祖先崇拝」

	父兄	
「祖先崇拝は日本人の美徳である」	54.8	44.3
「祖先を崇拝することによつて強い国民精神が養われる」	22.8	26.2
「民族の過去よりも常に将来のことを考えていなければならない」	18.1	20.6
「祖先崇拝は民族の進歩を妨げる」	3.8	7.2

このような傾向は前述の表によっても明らかなように、調査開始後現在まで殆んど変りなく経過してきている。而してこのような結果から我々は、最近よく言われるところの戦後子供達の宗教心の低いという非難に対して、宗教心の低下は単に子供達だけに限ったものではなく、父兄そのものの低下もあるのではないかということを指摘することができるのではないかと考える。そして祖先崇拝が必要であるならば、そして又我々もその必要を認めるものであるが、若しそうであるならば、先ず父兄自からがなっとくいく姿で祖先崇拝の範を示すべきではないかと考えるのである。

「祖先崇拝は民族の進歩を妨げる」という意見を父兄よりも2倍の割合で生徒が支持しているけれども、これも一歩突込んでみると、子供達は祖先をうやまうということを否定しているというよりも祖先崇拝という名のもとに、葬式や墓参などに際して不必要とも思われるような無駄な出費を特に強く否定するあまり祖先崇拝を否定しているのである。生徒のもつこのような点に関する考え方の健全さは次の昔からの習慣等に関する考え方の中によくあらわれているように思われる。……勿論こうした健全な考え方が抽象的なことばの上だけの理解にとどまってしまっているという危険もかんがえなければならないが、この点についてはいろいろなことがらを自からの問題として、生活に即してものごとをかんがえるという訓練をおこたらないようにしなければならないという点だけを指摘して、後の項目の解釈のところにゆずりたいと思う。

（5）「お正月に門松を立てて祝う習慣など。」

	父兄	生徒
「昔からの美くしい習慣はいつまでも守るべきだ」	34.2	42.2
「時代に応じて新らしいやり方をした方がよい」	35,7	23.6
「悪いことがなければいつまでも守りたい」	24.2	31.1
「無用な習慣である」	5,1	2.6

即ち前の項にも述べたように子供達のかんがえ方が不健全でない証拠として「昔からの美くしい習慣はいつまでも守るべきだ」と「悪いことがなければいつまでも守りたい」を合わせると、父兄58.4%　生徒73.3%　父兄よりもむしろ健全だとさえいえる。

而して又、調査開始以後の父兄並びに生徒の考え方の変遷をたどってみるとその中からそれぞれ二つの立場をとる考え方（大雑把に言えば進歩的と保守的な考え方との二つの考え方）がそれぞれ明らかな対立を示しつつ固定してきていると思われる。

即ち保守的な傾向をもつところの「悪いことがなければいつまでも守りたい。」という

意見は、父兄生徒同じ傾向であるが、いま父兄の推移をみると。

昭和24年	18.6%
〃 25年	21.2%
〃 26年	22.0%
〃 27年	24.5%
〃 28年	24.2%

反対に進歩的な傾向をもつところの「無用な習慣である」という意見は

昭和24年	2.5%
〃 25年	3.8%
〃 26年	5.5%
〃 27年	5.6%
〃 28年	5.1%

となって、何れも昭和2 年頃より増加したまま固定しかけてきている。このような傾向はさきに述べた天皇制に対してあらわれてきている傾向　中間的なものから両端に別れていこうという傾向　同じものとして注目しておかねばならないとかんがえられる。

（6）「どんな人が一番偉いか」

	父兄	生徒
「世界平和にこうけんする人」	56.1%	69.0%
「人類文化にこうけんする人」	36.3%	24.4%
「世界を支配する英雄」	4.2%	3.1%
「国威を発揚した人」	2.9%	1.7%

世界平和にこうけんし、人類文化にこうけんする偉い人としている意見は　父兄92.4 生徒93.5と極めて高い割合を示している。而してなかでも文化の発展よりも、更に、平和であることの方がより大切であると考える生徒の意見の現れとして「世界平和に貢献する人」を一番偉い人としている生徒の数は、父兄よりも13%多く、66%となっている。しかも、このような考え方は、昭和24年調査開始後多少の変遷はあったけれども殆んど固定しており、むしろ増加さえしている。次にこのような生徒の「世界平和に貢献する人」を偉いとする意見の推移を示す、即ちこの項目は

昭和24年	50.9%
〃 25〃	55.3%
〃 26〃	63.5%
〃 27〃	65.5%
〃 28〃	69.0%

となっている。我々としては、このような意識のめざめが　どういうすじみちでつちかわれてきているか明らかにすると共に、こうした考え方をただ単にぼんやりともっているというだけでなく、よりすじみちの通ったものとしてはっきりとさせると共に、中学生になってなお「世界を支配する英雄」というような考え方をなぜしているのかを明らかにしていかなければならないとかんがえている。

（7）「悪いことをした生徒をなぐることは」

	父兄	生徒
「いくら言つてもきかないときはなぐつてもしかたがない」	60.4%	58.0%
「絶対になぐつてはいけない」	25.0%	18.7%
「ときにむちでたたくのはこらしめになる」	10.0%	3.9%
「言葉でさとすよりもなぐつた方がききめがある」	3.5%	2.9%

以上のような結果であるが、この中で「絶対になぐってはいけない」という考え方について父兄と生徒を比較してみると　生徒の考え方の変化をより明らかにすることができるように思われる。即ち、調査開始以降「絶対になぐってはいけない」という考え方については父兄は殆んど変化していない。それに比べて生徒の方は明らかに減少の傾向を示してきている。而してこの減少してきている部分は、「いくらいってもきかないときはなぐってもしかたがない」にかわっている。これを表によって示すと次のような傾向である。

「絶対になぐってはいけない」という考えと「いくらいってもきかないときはなぐってもしかたがない」という考え方とを支持する生徒の考え方の推移は下のようになっている。

「絶対になぐつてはいけない」		「いくらいつてもきかないときはなぐつてもしかたがない」	
昭和24年	29.4%	昭和24年	58.0%
〃 25〃	26.6%	↓漸次減少 〃 25〃	62.2%
〃 26〃	28.6%	〃 26〃	62.3%
〃 27〃	25.7%	〃 27〃	65.5%
〃 28〃	18.7%	〃 28〃	73.7%

このような傾向は、それがこれからの子供達の考え方として　権威や権力を批判せず身の保全のためには長いものには　まかれてもしかたがないのだというような考え方に移行する危険を少なからずもってはいるけれども、従来そうであったように　自由と放縦とをはきちがえ、他人の迷惑などどうでも自分さえよければよいというような傾向を徐々に反省しつつ、より堅実なものの考え方を身につけるようになりつつあるのではないかと考えられる点から考えてみて一応好ましい傾向としてよいと思われる。

「言葉でさとすよりもなぐった方がききめがある」という意見が生徒の中にも 2.9%みられるけれども、これはなぐられる側の生徒の意見ではあるが殆んどなぐられることのない女子の意見であり、本当になぐられる男生徒の意見ではない。

(8)「子供の教育」

	父兄	生徒
「男も女も子供はすべて平等に教育されなければならない」	34.5%	64.8%
「子供の特徴を生かすために、それぞれ違つた教育をした方がよい」	32.8%	22.7%
「女の子よりも男の子の方に高等教育を一層よく受けさせておく必要がある」	10.2%	6.5%
「長男は家のあととりだから特別に教育されなければならない」	2.0%	8.7%

以上の結果から、子供達を含めた地域の人々の、子供の教育に対する考え方の概要を知ることができる。又このような考え方の、昭和24年以降の推移の状態をたどってみると次のようになっている。「男も女も子供はすべて平等に教育されなければならない」という意見の支持率は

	父兄	生徒
昭和24年	58.1%	74.4%
〃 25〃	44.0%	51.3%
〃 26〃	37.2%	52.8%
〃 27〃	50.2%	66.7%
〃 28〃	54.5%	64.8%

となって、昭和25年には父兄・生徒共に急に減少しその後漸次増加している。

又「子供の特徴を生かすために、それぞれ違った教育をした方がよい」に対する支持率は

	父兄	生徒
昭和24年	24.2%	10.0%
〃 25〃	38.0%	29.5%
〃 26〃	43.4%	36.5%
〃 27〃	31.5%	29.8%
〃 28〃	32.8%	22.7%

となって、前の傾向とは逆に、昭和25年に急に増加している。

このような推移をたどった理由として幾つかその原因を考えることができるが、特に大きな原因が、今迄にも何回か指摘してきたところの、人々の意識の「単純さ」と「あいまいさ」とにあるように思われる。特にここには、新らしい考え方に対して　充分な批判を行うことなくそれをうのみにしてしまう単純さあいまいさが強く表れてきていると考えられる。即ち、ふりかえってみれば、人々は終戦後叫ばれた自由平等を、それ程深く考えることなく、ただ自由と平等を何となく、いゝものだろう位に感じて昭和24年頃までこれを支持した。而して、やがて世の中の落付きと共にこの自由や平等を、漸く自分達の問題として取りあげるようになり、主体的にいろいろな問題を考えるまでになった。この問題についても、自分達の生活をよりどころにして自から考え自己の判断によって考えるようになると、子供を教育するということについても、ただ即ち　主体性をしっかりと確立していない父兄のあいまいな考え方は他からの影響によって容易に、しかもめまぐるしく変化していくのである。このような自からの考えを固執しないで，改めるという傾向はある意味では好ましいものであるが、併し民主的な考え方そのものをも容易にかえて　ともすれば逆行しようとする一つの流れに全面的に流され易いという點から充分反省されなければならないものをもっているであろう。

（6）「家庭で男が女より威張ることは」

	父兄	生徒
「いばらない方がよい」	73.8%	66.3%
「男が威張るのは悪いことだ」	16.4%	19.2%
「男の方が偉いからしかたがない」	5.4%	9.6%
「あたりまえだ」	3.9%	7.2%

「いばらない方がよい」と「男が威張るのは悪いことだ」を合わせて、男が家庭で威張ることを否定する意見の支持率は父兄90.2%　生徒85.5%と圧倒的に多数高い率を示している。が併し又これと全く反対な意見と考えられるところの「男の方が偉いからしかたがない」という意見と「あたりまえだ」という意見、即ち男女の不平等を肯定している人達が1割内外あることを示している。

而してこのような考え方の支持率は　調査開始以降殆んど変化することなく、現在に到っている。民主化の根底となる男女の平等というような考え方においてこのような問題を残しておく限り真の民主化は実現されそうにも思われない。

（10）「家の財産は」

	父兄	生徒
「男女に平等に分けるべきだ」	48.2%	67.4%

「長男の分を多くするのは当然だ」　28.5%　12.7%
「長男は家をつぎ親を養う義務があるから親の財産は長男に大部分ゆずるべきだ」21.0%　15.6%
「男の子だけ平等に分るべきだ」　1.7%　3.7%

一見して明らかなように、ここでは親の財産は「男女平等に分けるべきだ」という項目と「長男の分を多くするのは当然だ」という項目に関して、父兄と生徒との間に大きな違いのあることがみとめられる。

即ち「平等に分るべきだ」という意見を、父兄が48.2%しか支持していないのに生徒は67.4%支持しており「長男の分を多くするのは当然だ」という意見に対しては、父兄が28.5%支持しているのに、それよりも約15%低く12.7%しか支持していない。

生徒の考え方が、父兄のそれとこのように違っている理由として、一つは生徒の考え方の未熟さと、他の一つは、未熟ではあるが父兄よりもより高い民主的な意識が形成されているということにあるように思われる。

即ち、生徒は未だ未熟であって、家の財産の分配というようなことについては身に迫った問題として感じておらず　ただ観念として理想的な意見をもっているにすきないと思われることが多い。これが父兄との差を多きくしていると思われる。併し又生徒がこれからの社会態勢等を考えた上で、民主的な社会を作るためには、矢張り家の財産の分配も原則として当然平等に分配することが正しいと考えている結果であることも明らかである。財産分配の問題と切り離すことのできない親を養う義務の如きについても、これからは、長男だけがもてばよいという性質のものではなく、兄弟姉妹が皆同じように分け合うべきだという生徒の考え方がこのような意見をより多く支持させているのであろうと思われる。以下このようにして各項目毎に分析検討を加えると共に更にこれを職業年令別に考察し　考え方の傾向をより明確ならしめた。併し今次の報告に当っては紙数の関係から省略する。

〔Ⅱ〕中小商工業者の意識形成過程

（1）調査の目的

輿論調査　その1（質問紙）その2（面接）等の第一次の調査によって、地域における生活の課題を一応明らかにしたわけであるけれども、我々は更に、このような幾つかの課題の中で特に問題とされなければならない課題が、どのようなすじみちをへて生れてきているかを明らかにしようとして　この調査を取りあげ実施した。

（2）調査の方法

第一次の調査にもとずいてまとめたところの問題的な意識や問題的な行動の様式について、更に一応の文献研究を行い。それらがどのような社会的・心理的なうごきの下に生れてきているかの概要をとらえ次に更に面接によって具体的な確かめを行いそれらが生ずるに至った経過を明らかにしようとした。

○調査に際しては対象者に対しあらかじめ極く親しい人を通じて連絡をとっておき気楽に話して貰えるように特に留意した。

○訪問に際しては以上のような方法をとったわけであるが、話し合いはできる限り雑談のような形をとり入れ自然な形で話をすすめるよう意を用いた。

○面接の際用いた調査項目は、さきに行った調査のまとめを用意した。そしてそれ等につ